牧草及び飼料用作物

イタリアンライグラス

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
冠さび病	1. 抵抗性品種を採用する。 2. 窒素の増施を行う。 3. 遅播きを図る。 4. 多回刈り(若刈り)利用する。	1. 抵抗性品種:「ヤヨイワセ」、「さちあおば」、「タチムシャ」、「ヒタチヒカリ」、「ジャイアントイタリアン」、「エース」、「アキアオバ3」、「きららワセ」、「フウジン」、「ダイマジン」等 2. 厚播きすると発生し易い。
いもち病	1. 抵抗性品種を採用する。 2. は種時期を遅らせる。 3. エンバクと混播する。	1. 抵抗性品種:「ヤヨイワセ」、「マンモスイタリアンB(ビリケン)」、「エース」、「いなずまGT」、「フウジン」、「ダイマジン」等 2. は種期の気温が24℃以上で発病しやすい。

オーチャードグラス

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
すじ葉枯病	1. 抵抗性品種を採用する。 2. 被害葉を刈取り除去する。	1. 抵抗性品種:「はるねみどり」 2. 夏に発生が多い。
葉 腐 病	1. 刈り遅れしない。 2. パニカムへの転作を行う。	1. 過繁茂を避ける。
炭 疽 病	1. 被害葉を刈取り除去する。 2. 適期刈を励行する。 3. 肥切れに注意する。	1. 過繁茂を避ける。 2. 夏に発生が多い。
アワヨトウ	1. 雑草の繁茂している畑に発生が多いので除草する。 2. 発生したら早めに収穫する。	1. 除草剤散布後14～20日間は給餌しない。

アルファルファ

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
モザイク病	1. アブラムシ類の発生を抑える。 2. アブラムシ抵抗性品種を採用する。	1. 抵抗性品種:「ネオタチワカバ」
そばかす病・葉枯病(輪紋病)	1. 病原が糸状菌であるので早めに刈取り利用すること。 2. 抵抗性品種を採用する。	1. 抵抗性品種:「ケレス」、「ハルワカバ」
菌 核 病	1. 抵抗性品種を採用する。 2. は種前の深耕により、菌核を土中に埋める。 3. アルファルファの連作を避ける。 4. 被害株や菌核の除去などほ場衛生に努める。	1. 抵抗性品種:「ネオタチワカバ」

青刈りトウモロコシ

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
黒 穂 病	1. 抵抗性品種を採用する。 2. 被害株は早期に抜き取り処分する。 3. 発病ほには3年以上他作物を栽培する。	1.抵抗性品種:「SL0746」 2. 胞子は数年間生存し、土中越冬して飛散し感染するので、被害株を圃場にすき込んだり堆肥用に供しない。 3. **被害植物を給餌すると中毒を起こすので注意する。**
すじ萎縮病(ヒメトビウンカ)	1. は種時期を早める。 2. 抵抗性品種を採用する。	1. 8葉期日までは感染し易いのでヒメトビウンカの最盛期と重ならないように播種期を早める。
ごま葉枯病	1. 抵抗性品種を採用する。 2. 遅播き、密植をさける。 3. 連作をしない。 4. 雑草の除草を励行する。	1. 抵抗性品種:「SH5702」、「LG2533」、「LG3490」、「タカネスター」、「NS115スーパー」、「ゆめそだち」、「KD777New」、「KD850」、「SH1353」、「TX1334」、「TX1277」等 2. 肥料切れにより発病を助長するので、肥培管理に努める。
根 腐 病	1. 抵抗性品種を採用する。 2. 生フンの多量施用を避ける。 3. 連作をしない。 4. 被害株を完全に除去する。 5. 雑草を除去する。	1. 抵抗性品種:「NS115スーパー」、「SH1353」、「TX1334」、「TX1277」、「TH13101」、「TH2176」等 2. 排水不良ほ場で発生しやすいので、できるだけ排水良好なほ場で作付けする。 3. 8～9月の高温多雨で発生が助長されるので、発生が予想される圃場では、特に台風に注意し、8月中旬以前に収穫できる品種・播種時期の選択を検討する。
ツマジロクサヨトウ	1. 定期的な生産ほ場の見回りによる早期発見、早期防除に努める。 2. 農薬の使用が難しい場合は、早期刈取り又は速やかなすき込みを行う。収穫した際は、速やかに複数回耕転を行う。	1. ほ場の見回りは、幼虫による葉の食害痕や虫ふんの有無を確認する。なお、老齢幼虫になると農薬効果が低下するため、若齢幼虫のうちの防除が望ましい。 2. 早期刈取りを行う場合は、水分が高いことに注意する。

ソルガム

病害虫	防　除　方　法	防除上の注意事項
アワヨトウ	1. 早期刈取りを行う。 2. 雑草を除去する。	
ツマジロクサヨトウ	1. 定期的な生産ほ場の見回りによる早期発見、早期防除に努める。 2. 農薬の使用が難しい場合は、早期刈取り又は速やかなすき込みを行う。収穫した際は、速やかに複数回耕転を行う。	1. ほ場の見回りは、幼虫による葉の食害痕や虫ふんの有無を確認する。なお、老齢幼虫になると農薬効果が低下するため、若齢幼虫のうちの防除が望ましい。